

## 第5章

# プーチンの大罪？なぜ8年前に 進攻しなかったのか

— 厳寒と暗闇のウクライナから脱出する政権エリートたち



政権エリートと新興財閥たちが国を逃げ出して  
我が世の春を楽しんでいる南仏コートダジュール

1

日本では相変わらずコロナ感染者拡大のニュースがメディアを賑わせています。これまでの経験からすると、そういうときは必ずウクライナ軍が劣勢の時です。

そうすれば、岸田政権が巨額の税金を使って支援してきたキエフ政権の腐敗・墮落・敗北から、国民の眼をコロナ騒ぎに転換できるからです。今回もその経験則が、どうも当たっています。

というのは、クリミア大橋破壊の報復としてロシア軍がウクライナ全土への本格的な爆撃を開始してから、キエフを始め全土で停電が相継ぎ、暖房どころか部屋の明かりすら危うくなってきていて、このままでは厳寒の冬を越せない恐れが出てきているからです。

ロシアへの経済制裁の「ブーメラン効果」で、ロシアからの石油や天然ガスが入ってこなくなつた欧州一円が、薪まきと薪トープを買いあさっているのですから、まして戦場になっているウクライナが、まともに冬を越せるはずがありません。

2

その証拠に、前章でも紹介したように、ウクライナ最大の電力会社はウクライナ国民に、

冬場の3〜4カ月だけでも国外に移住してくれと呼びかけたのです。次の記事を見てくださる。

\* Power boss urges Ukrainians to leave the country 「電力会社の幹部がウクライナ国民に国外移住を要請」  
<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1151.html> (『翻訳NEWS』2022/11/27)

この事態をさらに確認するかのように、WHOすら「少なくとも200万人が国外脱出」という予測を出すようになりました。

\* At least two million Ukrainians will migrate in winter - WHO  
「少なくとも200万人のウクライナ人が冬に移住することになる」とWHO」  
<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1152.html> (『翻訳NEWS』2022/11/27)

私は、この記事を読んで「その200万人は、どこに移住するのだろうか」という疑問が、先ず頭に浮かびました。

というのはEU諸国に移住しても、先述のとおり、それらの国民すら、まともに冬が越せない恐れがあり、薪まきや薪ストーブを買いあさっていて、今では、その薪すら手に入らなくなってきたのですから。

\* German firewood prices skyrocket-data (ドイツの薪まき価格はうなぎ登り)  
〈副題〉 The costs are almost double what they were during the same time last year. Destatis reports (その

価格は昨年と同時期と比べれば約2倍。ドイツ連邦統計局)

<https://www.rtt.com/business/563351-german-firewood-prices-skyrocket/> Sep 25, 2022

ですから、200万人以上がウクライナから脱出したとしても、彼らを受け入れるゆとりのある家庭がEU諸国にあるかどうか、それが大きな疑問だからです。

3

また、そもそも家族と一緒に国外脱出を図るためには、移動の旅費や宿泊費を考えると、よほど裕福な家庭でないと不可能ではないかと思われます。

また国外に親戚や知人をもつ富裕層や知識人は、かなり多くがロシア軍の進攻直後に移住していますから、国内に残っているのは貧民層だけということになりかねません。

ましてゼレンスキー大統領は、兵士確保のため国民に移住を禁じていましたからなおさらです。まさに「経済徴兵制」です。

このようすをスイス情報局幹部だったジャック・ポーは論文「ハリコフ撤退と新しい動員」で次のように書いていました。以前にも紹介したのですが、次に再録しておきます。

\* Kharkov and Mobilization

「ジャック・ボー…ハリコフからの撤退とロシア軍の新動員について考える」  
<http://immethod.blog.fc2.com/blog-entry-1077.html> (『翻訳NEWS』2022/10/06)

西側諸国では、動員を避けるためにロシアを離れようとした人々について随分わめき散らしている。そういう人々は確かに存在する。

他方、徴兵を逃れようとした何千人ものウクライナ人が、ベルギーの首都ブリュッセルの街角で、パワフルで高価なドイツのスポーツカーに乗っているのを見ることができると同じである。

しかし、徴兵所の前に長い行列を作るロシアの若者たちや、動員を支持するロシア民衆のデモについては、あまり宣伝されていない。

要するに、ウクライナ政府の高官や富裕層の子弟は抜け道を知っているので、ロシアの猛攻撃を受ける前に、みごとな「徴兵逃れ」をしてEU諸国の大都会で優雅な生活を楽しんでいたわけです。

しかし今やロシアは、クリミア大橋の爆破、天然ガスのパイプライン「ノルドストリーム」の爆破、ザポリージャ原発への練りかえされるミサイル攻撃を受けて、本格的な戦争にのりだしました。

こうしてウクライナ全土が暗闇に包まれることになり、電力会社の幹部は国外移住を国民に要請する事態になっていることは、前述のとおりです。

しかし最近届いたばかりの情報は、事態が更に深刻化していることを伝えていきます。オンライン誌 *Internationalist 360*。(November 24, 2022) は、「キエフをはじめ、ウクライナのほとんどの都市で電気が使えなくなった」として、そのようすを次のように説明していました。

本日未明、ロシア軍がウクライナの電力網を遮断した。

これまでの攻撃では、配電能力は需要の50%程度に制限されていた。1日に数時間の制御された停電により、国内のほとんどの地域で数時間だけでも電気を供給することができた。

しかし今回の攻撃は、より大きな問題を引き起こした。配電網だけでなく、ウクライナの電力生産施設と配電網をつなぐ変電所も攻撃された。その結果、ウクライナの4つの原子力発電所と15基の原子炉はすべて停止状態にある。

\* Ukraine - Lights Out, No Water and Soon No Heat

「ウクライナ。明かりは消え、水もない。まもなく熱源もなくなる」

<http://tmmethodblog.fc2.com/blog-entry-1161.html> 【翻訳NEWS】2022/12/06



ウクライナ全土にたいするロシアの爆撃  
<https://www.moonofalabama.org/15i/ukrelhit1.jpg>

4

このウクライナ全土にたいする攻撃は上の地図からも明らかです。

この地図では、説明がすべてロシア語になってるので分かりにくいかも知れませんが、おこなわれた攻撃の全体的イメージだけはつかんでいただけるものと思います。

このような攻撃の結果、ウクライナではどのような生活が待ち受けているでしょうか。この記事はそれを次のように描き、このままではキエフ政権は和平交渉に応じる以外に道はなくなるのではないかと結論づけています。

電気がなければ、都市の配水システムに水が流れない。水がなければ、トイレも使えない。公衆衛生が損なわれる。ウクライナのインターネットもダウンしている。

「住めない国」になりつつある国は、戦争をして勝つチャンスはほとんどない。交通手段も、電気も、暖房も、通信手段もない状態では、すべてが信じられないほど困難になる。

このような状態を逃れるためにEUになだれ込む難民の流れは、ウクライナをロシアとの和平交渉に追い込むよう、ヨーロッパに圧力をかけることになる。キエフ政権は和平交渉に厳しい条件をつけてくるだろうが、この混乱から抜け出すには、それ以外に方法はない。

しかし、ロシアによるウクライナ全土への爆撃も、ウクライナ軍が前線でロシア軍に勝利していれば、まだ未来に光があるかも知れません。が今のところは、むしろ惨敗に終わっているようですから、前途は真つ暗闇です。

このような状況についても、ツイッターによる映像（多分、小型ドローンで撮影したものと思われる）を元に、この記事は次のように解説しています。

ウクライナ軍はヘルメットや防弾チョッキなど、かなり装備が充実しているようだ。しかし、



彼らには何の支援もない。

ロシア軍の歩兵は反撃している。うまく狙いを定めた迫撃砲射撃、大砲、戦車、航空攻撃によって支援されている。ロシア軍は上空に無人偵察機を持っており、全景を見ることが出来る。ウクライナ部隊はライフルと数個の手榴弾以外何も持っていない。攻撃小隊が破壊された後、ロシア軍の大砲が攻撃し、彼らが駐留していた工業地帯を破壊する。ウクライナ軍の作戦は大失敗に終わった。ウクライナ軍は全員死亡したようだ。ロシア側の犠牲者は全く無しか、あったとしても少数のようだ。

このようすは、下記の映像で見ることが出来ますから、ぜひ自分の眼で確かめてください。動画は2つありますが、初めのは2分20秒、2番目のものは1分20秒ですから、そんなに時間はとらないはずです。

[https://twitter.com/narrative\\_hole/status/1595195664455065601](https://twitter.com/narrative_hole/status/1595195664455065601)

5

さて、このような状況を前にしてウクライナの支配層はどのように行動したでしょうか。何と驚いたことに、彼らは厳寒の冬から逃れるために、暖かいフランス南部の有名な保養地コートダジュールへと脱走したのでした。



大統領になったばかりのゼレンスキーが大統領官邸に向かう

このことを詳細に紹介したのが「さようならキエフ、こんにちはコートダジュール」と題する次の記事です。なお、この記事を書いたオルガさん (Olga Sukharevskaya 女性) は、ウクライナ出身の元外交官です。

\* Bye-bye, Kiev, hello Cote d'Azur: As Westerners send aid, here's how Ukraine's corrupt elites are profiting from the conflict  
「さようならキエフ、こんにちはコートダジュール。西側は援助物資を送るが、ウクライナの腐敗したエリートは、紛争から利益を吸い取る」  
<http://immethodblogfc2.com/blog-entry-1166.html> (翻訳NEWS) [2022/12/10]

この記事の副題は「政権幹部と新興財閥はキエフに送られた資金援助の多くを横流しして自分の懐たしぼに入れていいる」(Officials and oligarchs have diverted much of the financial support sent to Kiev) となっています。

この副題だけでも内容は、ほぼ想像できるのですが、記事をよく読んでみると次のような実態が暴露されていて、その腐敗ぶりに驚かされます。

ウクライナのエリートたちの集団逃亡は武力紛争以前から始まっていた。

二〇二二年二月一日、ウクライナ大統領の議会派閥（国民の僕 *Servant of the People*）の代議士37人が突然行方不明になったのである。翌日、議員の出国が禁止されていなければ、他の議員も間違いなく加わっていただろう。

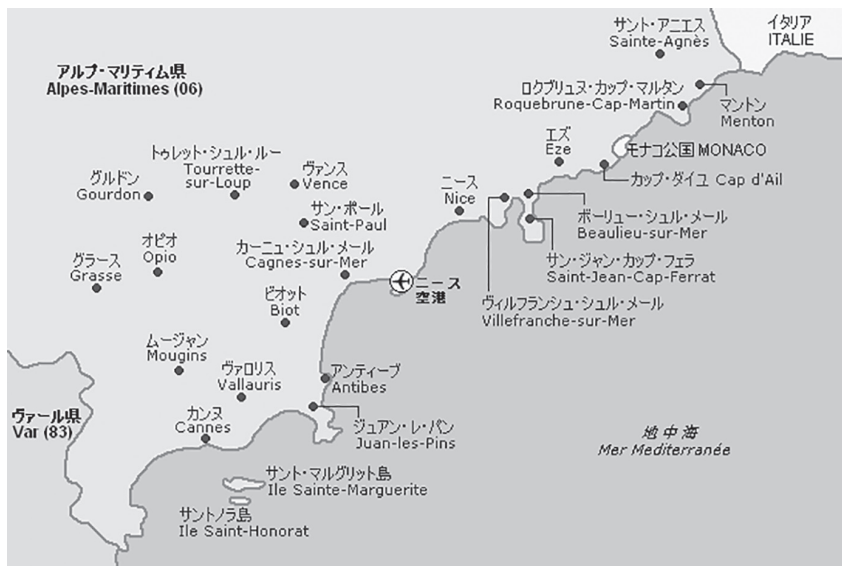
一方、元政府高官やオリガルヒは、より自由に動き回ることができた。イタリアの新聞「ラ・レプブリカ」によると、二月一日だけでも、キエフのポリシユポリ空港からビジネスジェット機が20機も飛び立った。

このように、ロシア軍の進攻が始まりそうだという情報をつかんでいたウクライナのエリートたちの集団逃亡は、武力紛争以前から始まっていたのです。

6

ではロシア・ドネバス軍の戦いが進行したあとの動きはどうだったのでしょうか。それは次のように述べられています。

二〇二二年の夏から初秋にかけてウクライナ・プラウダ紙は、この戦争中に南仏コートダ



ウクライナのエリートたちが楽しんでいる南仏。イタリア近くにモナコ公国がある

ジュールで休暇を過ごすウクライナの億万長者や高官の姿を目撃した調査ドキュメンタリーをいくつか制作した。

「モナコ大隊」という皮肉なタイトルの動画では、ウクライナの大富豪たちが南仏モナコ公国の別荘や豪邸、さらにはヨットで楽しんでいる様子が映し出されている。

動画の最初のパートでは、国際刑事警察機構 (Interpol) の指名手配リストに載っている実業家コンスタンティン・ゼヴァゴが、7000万ドル相当のプライベートヨットでくつろぐ姿が映し出される。

ゼヴァゴの家族が下船したヨットが、コートダジュールの海岸線を彩っている。

ハリコフの企業家アレクサンドル・ヤロスラフスキーは、ヨットを売却し、その資金をハリコフの復興に振り向けると約束していたが、そのヨットが富豪ゼヴァゴのヨットと並走しているのが見える。

ウクライナ全土が停電に追い込まれる以前から、大富豪たちは、多くのウクライナ兵が戦死したり傷病兵や捕虜になっているさなかに、こんな生活を楽しんでいたのです。

7

しかしウクライナのエリートたちが選んだのは、南仏コートダジュールだけではありませんでした。ゼレンスキーの与党「国民の僕」<sup>しもべ</sup>の議員でさえ、国外にオーストリアの首都ウィーンを逃走地を選んでいるのです。

先述のオルガさんの記事によれば、ウクライナ・プラウダ紙は、それを次のように報じています。

ウクライナ・プラウダ紙は、ゼレンスキー率いる「国民の僕」党の議員、アンドレイ・ホロドフに、インタビューをおこなうことができた。何と彼は現在ウィーンに住んでいるのだ。オーストリアの首都ウィーンの地は、右翼民族主義者のニキータ・ポトウラエフとアイダー大隊の元隊長セルゲイ・メルニチュクにも選ばれている。特に後者は、アムネスティ・インターナショナルが報告した戦争犯罪で知られる人物だ。それどころか、ウクライナ憲法裁判所の元長官、59歳のアレクサンダー・トウピツキーと45歳

の元ウクライナ検事総長ルスラン・リャボシヤプカも、国内の「塹壕」ではなく、外国の「塹壕」を選んだ。

このような行為がどうして「国民の僕」を標榜している党の議員に可能なのでしょうか。党名は単なる選挙対策に過ぎなかったことが、これでよく分かります。

またウクライナ国内では、兵士たちがロシア軍との戦いで前線の「塹壕」生活を強いられているのに、キエフ政権の元高官たちは、オーストリアの首都ウィーンという優雅な「塹壕」を楽しんでいたのです。

8

このような「塹壕」生活は、南仏やオーストリアにとどまりませんでした。それは中東のカタールやUAE（アラブ首長国連邦）にまで及んでいました。先の記事は次のように続いています。

ウクライナ議会の議員たちは、戦争中なのに、国にとって極めて重要な法律の採択を急がない。



ウクライナの国会議員が楽しんでいると言われるモルジブ共和国

テレグラム・チャンネル「Volynニュース」によると、三月一日の時点で、20人以上の国会議員が不特定多数の理由で海外に移住していた。

その地理は広範囲に及ぶ。ポーランド、モルドバ、オーストリア、ルーマニア、ハンガリー、イギリス、スペイン、フランス、アラブ首長国連邦、カタール、イスラエル、などなど。三月には、ウクライナ検察庁が海外に残った6人の国会議員の行動についての調査を開始した。

だが、どうやら、戦争も刑罰も、ウクライナの議員を働かせることはできないようだ。七月二〇日の国会には、450人の議員のうち99人しか出席しなかった。夏、コートダジュール、モルジブ、ヨットなどで気が散ったのだろう。ウクライナ自身の防衛については、外国人志願兵に任せればいい、と彼らは言っている。

このような議員たちの行動を見ていると、彼らがこのウクライナ紛争を自分たちの戦いだと見ていないのではないかと思われ  
されます。

ちなみに、彼らが避暑地・避寒地として利用しているらしい島嶼国モルジブはインド洋に浮かぶ熱帯の国で、1000を超えてる珊瑚島と26の環礁から成り、ビーチやブルーラグーン、そして豊かに広がる珊瑚礁で知られています。

## 9

ウクライナの議員たちが、このような無責任な行動をとる理由はどこにあるのでしょうか。それはもちろんゼレンスキーを初めとする政権幹部が腐敗の極致であるからでしょう。しかし私は、もうひとつの理由があるのではないかと考えています。つまり、議員たちは、「この紛争はアメリカとロシアの戦いであって、我々はウクライナという土地を提供して代理戦争を戦わされているのだ」と考えているのではないか、と思うのです。

要するに、「アメリカは自分の国土を戦場にしてロシアとの戦争はしたくない、だからウクライナを戦場にしてロシアと戦わせる」「しかもウクライナ軍を砲弾の餌食(CannonFodder)として使えばアメリカ兵を死なせずに済む」というわけです。

アフガニスタンにソ連軍を誘き出して10年間もイスラム原理主義勢力と戦わせた結果、ソ連は崩壊したのですから、今度はロシア軍をウクライナに誘き出して、ロシアが崩壊す



るまでウクライナ軍や外国人傭兵に戦わせる、そのためには少々の出費は覚悟のうえだということでしょう。

ゼレンスキーはアメリカやNATO諸国に「金と武器をよこせ」と極めて傲慢な態度をとっているのも、このように考えるとよく理解できます。以前にも書きましたが、ゼレンスキーが「俺たちは自分の領土と国民の命を差し出して、おまえたちの戦争を戦ってやっているのだから、もっと金と武器をよこせ」と言う権利がある」と考えたとしても、何の不思議もないわけです。

10

事実、「ミンスク合意2」のときも、ロシア軍の進攻が始まったときも、ゼレンスキーは、ロシアとの交渉に応じようとしたのですが、そのたびに英米から横やりが入りました。その間の事情を、『特別作戦Z』を著して有名になったスイス情報局幹部ジャック・ポーは次のように述べています。

思い起こせば、ゼレンスキーは二〇二二年二月二五日に最初の交渉要請をおこない、ロシア

はこれを受け入れたが、EUは4億5千万ユーロの武器供与という最初のパッケージを提示してこれを拒否したのである。

三月、ゼレンスキーは再度提案をおこない、ロシアはこれを歓迎し協議する用意があった。しかし、EUは再び5億ユーロの武器提供という第二のパッケージを提示してこれを阻止しに来たのである。

ウクライナ・クラウド紙の説明によると、ボリス・ジョンソンは四月二日にゼレンスキーに電話をかけ、提案を撤回するよう求め、さもなければ西側諸国は支援をやめると言った。

そして、四月九日、キエフを訪問したボリス・ジョンソンは、ウクライナ大統領に同じことを繰り返し言った。

したがって、ウクライナはロシアと交渉する用意があったのだが、「欧米は交渉を望んでいない」と、ボリス・ジョンソンは八月の最後のウクライナ訪問の際に再び明らかにしたのである。ロシアに「ドンバスの国民投票とロシア編入」を促したのは、交渉が成立しないという見通しであったことは確かだ。

忘れてはならないのは、これまでプーチンが、ウクライナ南部の領土をロシアに統合するという考えを、常に拒否していたことである。

もうひとつ忘れてはならないのは、もし西側諸国がウクライナとその領土の完全性を重視しているならば、フランスとドイツは二〇二二年二月以前にミンスク合意に基づく義務を確実に果たしていたであろうことである。

さらに、二〇二二年三月にゼレンスキーが提案したロシアとの和平交渉を進めさせることも

できただろう。問題は、欧米がウクライナの利益ではなく、ロシアを弱体化させることを目的としていることである。

11

このジャック・ポー大佐の論文は「Kharkov and Mobilization」の翻訳なのですが、私はこれを読んで、今まで私が考えてきたことが間違っていなかったを確認できて非常に嬉しく思ったことを憶えています。

\* Kharkov and Mobilization ジャック・ポー「ハリコフからの撤退とロシア軍の新動員」  
<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1077.html> (『翻訳NEWS』2022/10/06)

その後、この論文が右のように『翻訳NEWS』に和訳が載りましたから、心と体にとりがある方は、ぜひ読んでほしいと思います。

私は、『正体1』で、「ゼレンスキーが『ミンスク合意2』を順守していれば、ドンバス南部の2カ国をウクライナの特別自治区として保持できたはず」と述べました。

ところが今は、ドンバス2カ国だけでなくポリージャ州とヘルソン州も失うことに



プーチンが息子たちを兵士として戦場に送っている母親たちに謝罪

なったのです。ジャック・ボー大佐も同じことを上の論文で述べていて、私が『正体1』（9・13頁）で述べてきたことの正しさを改めて裏付けてくれました。

また私は、前著で「もしプーチン大統領が二〇一四年のクーデターの時点で、住民が決起して立ち上げたドンバス2カ国の独立を承認して、クリミアと同じようにロシアに併合していれば、この8年間にウクライナ南部で失われた1万3000〜4000人もの命を、救うことが出来たはずだ」とも、述べました。

12

もうひとつ嬉しかったのは、先日プーチン大統領が「息子たちを兵士として戦場に送っているお母さんたち」と懇談する会をもち、私が書いていたことと同じことを述べ、お母さんたちにたいして謝罪したというニュースが届いたことでした。

\* Putin expresses regret over Donbass

「プーチン大統領は、再統合を早く実施しなかったことを、ドンバス兵の母親たちに謝罪」  
<http://mmmethodblog.fc2.com/blog-entry-1164.html> (『翻訳NEWS』2022/12/06)

しかし繰り返しになりますが、これは謂わば「プーチンの大罪」です。記事の次の副題も示しているとおり、ロシアへの併合はもっと早くにおこなわれるべきでした。

\* Reunification with Russia should probably have happened earlier, the president told the mothers of soldiers  
「ロシアへの再統合はもっと早く実施すべきだったと大統領は母親たちに語った」

この懇談会でプーチン大統領は、「ミンスク合意は実現可能だと思っていた、それが間違っていた」と告白しています。

問題は、先の記事でジャック・ボー大佐が述べているように、「欧米がウクライナの利益ではなく、ロシアを弱体化させることを目的としていた」ことにプーチン大統領が気づくのが遅すぎたということでした。

やはり元財務次官ポール・クレイグ・ロバーツが言っているように、プーチンは「お人好し」で「間抜けなロシア人」だったのです。(『正体2』51・52頁、56・58頁)

ポーランドの領土にミサイルが落下して民間人ふたりの命が失われたという報道があり、それを例によってゼレンスキー大統領は「ロシアの仕業だ」と声高に非難しました。

しかし、数々の証拠から「そのミサイルはロシアからだとは考えられない」という声が段々と多くなりました。私も、前章でスコット・リッター元国連武器査察官の意見を紹介しました。

ところが又もや「ロシア軍がウクライナの住宅を攻撃し、また3人の被害者が出た」というニュースが飛び込んで来ました。

ロシア軍は軍事関連の施設以外は攻撃しないことを原則にしてきたのですから、そんなことはあり得ないと思っていたのですが、相変わらず大手メディアによるロシア叩きはなかなか鳴りを潜めません。

そこで、やむなくパソコンに向かったのですが、書き始めたら、いつのまにか話題が横にそれてしまって、なかなか本題に戻ることができませんでした。

さて問題の住宅に落下して市民を負傷させたと言われるロシアのミサイルですが、これについては、ロシアの国連大使ネベンジャは、二〇二二年一月二三日に開かれた国連安保



ロシア軍によるキエフ軍の兵站爆撃の最中、住宅が炎上。(2022/11/23)  
ウクライナはいつもどおりロシアの仕業だと非難したが落下したミサイル破片のLIFT  
という印はアメリカ製であることを示している(右上の写真がそのアメリカ製ミサイル)

理事会の特別会合で、次のように述べました。

モスクワが標的にしているのは軍事関連施設であり、民間の住宅を標的にしていないとネベンジャ氏は述べ、住宅地への遺憾な被害は、人口密集地に配備されたウクライナの防空網によって引き起こされることが多いと主張している。

「その結果、ミサイルの破片や迷走したウクライナのロケットが、ロシアが狙ってもいない物に当たる」とし、キエフとその近くのヴェィシユゴロドで被害を受けた住宅で見つかった米軍提供のロケットの破片とされる写真を公開した。この写真は水曜日二三日にウクライナ自身も認めているものだ。

\* Moscow explains its Ukraine objectives to UN (モスクワ、国連でウクライナの標的について説明：NATOによるモスクワへの代理戦争)の中、ミサイル攻撃は軍事兵站を標的にしていると国連大使が発言)  
<https://www.rt.com/news/567073-security-council-ukraine-proxy-war/> 24 Nov, 2022

14

ウクライナは右記の事件の前にも「ロシア軍がウクライナの住宅を攻撃し、3人の被害者が出た」と主張していたのですが、この九月二六日のウクライナ軍支配下の都市の住



宅攻撃について、ニューヨークタイムズ紙は「それはロシアのミサイルではなく、アメリカの提供したミサイルだった」と報じたのです。

今まで同紙はキエフ政権支持の立場だったはずなのに、これは何という変わりようでしょう。同紙も、「そろそろゼレンスキーにお引き取りを願わなくては」と思い始めたのかも知れません。

このNYT紙の報道を知らせてくれたのは次の記事でした。

\* U.S-supplied missile hit Ukrainian home - NYT

「ウクライナの民家を直撃したミサイルは米国供与のもだった (NYTの記事)」  
<http://innmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1168.html> (『翻訳NEWS』2022/12/10)

ウクライナで九月に、アメリカからキエフに供給されていたアメリカ製の対レーダーミサイルが住宅に命中し、3人が負傷した、とニューヨークタイムズ紙が報じた。

AGM-88B高速対レーダーミサイル(HARM)による攻撃は、九月二六日にウクライナ軍支配下の東部の都市クラマトルスクで発生した、と同紙は一月二三日に報じた。

ウクライナ軍のジェット機が発射したとされるミサイルは、5階建ての住宅ビルの最上階に命中した。目標を外れて誤作動を起こした可能性が高いという。廃墟と化したアパートに直撃したが、同紙によると、近くのアパートに住む3人が負傷する結果になった。

御覽のとおり、キエフ政権は、自分のミサイルが引きおこした住宅爆撃を、ポーランドの時と同じように、「ロシアによるテロ行為だ」と非難している。

しかしゼレンスキーにとっては不都合なことに、その反論がNYT紙から出てくるとは思いもかけなかったに違いない。これでは世論のゼレンスキー離れが確実に進行するのではないか。それはともかく、RT記事はさらに、NYT紙の報道について次のように続けている。

NYT紙によれば、同紙記者が現場でミサイルの破片の一部を手と眼で検査することができたという。

そして、その破片がAGM-88B ミサイルにのみ使用される電子回路カードの組立品であることを示す組立番号が含まれていることを発見した。

また、同紙記者は爆発した弾薬の他の破片も検査し、古い米国製ミサイルのものと同じとしたという。

HARMミサイルの標的は不明だが、標的であったロシアのレーダーを発見できず、燃料も使い果たした後にクラマトルスクの住宅に命中した可能性があると同紙は示唆した。

また、この記事は、匿名の米軍将校がNYT紙に対し、「問題のミサイルは古い余剰在

庫から来たものであることは間違いない」「ただし米軍は現在、より新しいHARMモデルを使用しているため、これは今は使っていない」と述べたことも、紹介しています。

とすると、ウクライナは、ロシアを潰すための道具、大砲の餌食 (Cannon Fodder) として使われているだけでなく、古くなった兵器の在庫処分、新しい兵器の実験場として使われているのではないかという疑いすら出てきます。

アメリカの軍産複合体としては、在庫処分できるのでからこんなに美味しい話はないでしょう。このような状況では次のような論考が出てくるのも当然かも知れません。

\* U.S. Empire Views Ukrainians and Russians as Lab Rats for Weapons Testing (帝国アメリカはウクライナ人とロシア人を武器の性能を試すための実験動物として見てくる) By Caitlin JOHNSTONE, November 18, 2022  
<https://strategic-culture.org/news/2022/11/18/us-empire-views-ukrainians-and-russians-as-lab-rats-for-weapons-testing>

いずれにしても不幸なのは、国外に脱出できず、凍死しかねない環境で冬を越さねばならないウクライナ国民と「経済徴兵制」のもとで前線に送られるウクライナ兵士でしょう。無駄な死からロシア兵を解放するためにも、今は、「そろそろゼレンスキーにお引き取りを願わなくては」と声をさらに大きくしなければならぬ転換点に来ているのかも知れません。NYT紙ですら、そのような姿勢を見せ始めているのですから。

〈本章のキーワード〉

元スイス情報局幹部ジャック・ボー大佐

さようならキエフ、こんにはコートダジュール

ゼレンスキーの与党「国民の僕」の腐敗・墮落

元財務次官ポール・クレイグ・ロバーツの言「お人好しのプーチン」

武器の性能を試す実験場としてのウクライナ、実験動物としてのウクライナ人とロシア人